

386
307

集歌 二春と一と夏 遠き子らへと

始



特 233
388



歌集
春
と
一
と
夏
遠
き
子
ら
へ
と



寝	深	寝	寫	明	春	池	去	母
	霧	前		月	の	の	る	様
	の	散		の	の	の	月	を
前	日	歩	眞	夜	嵐	月	の	偲
							今	び
							日	て
滿	深	小	外	淋	木	綠	立	廣
	き		國	し	葉	の		き
	森			き	木	木		
月	へ	雨	に	に	舟	蔭	寄	家
休	胡	ト	ベ	或	御	師	縫	夢
戰	蝶	ト	ト	日	國	の		
の	の	サン	ト	曜	の	君		
朝	色	(御盆)	ン		菊			
愛	冬	廣	雪	寒	土	な	バ	暮
ら	の	間	の	き	曜	れ	ル	秋
し	日	の	カン		日	ぬ	コ	よ
き	和	冬	ブル	日	の	仕	ン	リ
小					夜	事		
文								

二春と一夏遠き子らへと

冬	の	夕	焼	ア	ボ	ネ	壽	府	よ	り	の	初	夏	の	便	り	二	年	前	の	今	日				
ク	リ	ス	マ	ス	の	翌	に	満	つ	る	月	か	昨	夜	の	荒	れ	暗	黒	最	後	の	御	別	れ	
昭	和	九	年	十	二	月	廿	八	日	一	昨	年	の	ク	リ	ス	マ	ス	、	遠	き	子	ら	へ	と	
冬	の	森	其	翌	朝	朝	不	新	家	天	朝	の	散	歩	天	朝	の	散	歩	天	朝	の	散	歩	天	
飛	雪	孫	達	へ	兎	朝	朝	の	散	歩	天	朝	の	散	歩	天	朝	の	散	歩	天	朝	の	散	歩	
公	園	の	芝	孫	達	へ	初	年	の	今	日	去	年	の	今	日	去	年	の	今	日	去	年	の	今	日
朝	の	月	霧	の	夜	より	盛	年	の	今	日	去	年	の	今	日	去	年	の	今	日	去	年	の	今	日
年	の	暮	に	遠	き	娘	へ	カ	ビ	シ	マ	盛	年	の	今	日	去	年	の	今	日	去	年	の	今	日
夜	の	雨	天	候	の	變	め	カ	ビ	シ	マ	盛	年	の	今	日	去	年	の	今	日	去	年	の	今	日
平	和	宮	歸	候	の	變	め	カ	ビ	シ	マ	盛	年	の	今	日	去	年	の	今	日	去	年	の	今	日
言	波	宮	歸	候	の	變	め	カ	ビ	シ	マ	盛	年	の	今	日	去	年	の	今	日	去	年	の	今	日
近	き	人	へ	と	美	し	き	人	エ	取	人	草	寶	取	人	草	寶	取	人	草	寶	取	人	草	寶	取

二春と一と夏遠き子らへと

四方よりと三人の様を問はるれど細り行く身の力なき筆

世の常の人の強さに愧づかしと心はやれど筆は動かす

書きえねど心走りて我が子等へ日々の思ひの筋の續きし

子等ゆると方法すべも知らねどありのまま眞誠まことの心一行づつに

心より洩るる眞誠まことを書き留とむるに容易にあらぬ筆持つ我われの

問はれねど心の厚く我等へと遠く偲おもはるる方もありとか

やむなくば眞誠まことのままを明しつつ眞誠まこと心に答ふべきかと

其折は

形得ぬ詞のさたにあるなれど心讀まれて寛き御心

十一年武府の盛夏に筆を止む心のままを綴り終りて

昭和十二年

兎や角と過す其間に夏は來ぬ隔て隔てし國居し居れば

遠き程日々の感激聖戰場身をも忘れし何にかにと皆

友方へも

細かにと思ふがうちに日も月も年も新たになりけるかな

小事なれど遠き子等へと我とても知らすべきとも思ひなほして

明瞭に短くあれど罪なれど三十一字拜借せしも

假字さへも使ひ分けえぬ身となりぬ幾十年と筆も執らねば

拙^{つたな}けど了解^{わか}られたしと希望して遠き子等へと筆執りたれど

昭和十三年五月

武府にて 安 達 鏡 子

346 Avenue Louise
BRUXELLES, Belgique

母様を偲びて

幼時^{幼なごき}うかがひたりし母様の或言^{ことごと}々を偲^{おも}びて書きぬ

家建つる様^{さま}より見れば大方の事々分る土臺よりにと

物は皆大小共に土臺てふ重要さをば忘れぬ様^{さま}に

第一に確^かむべき事を確^かめずして間に合ふならば大幸なりと

容易^{たやす}くと受合はれても其儘^{まま}に事の成行待つのみかはと

何に致せ人をば知れよ何よりも過ありとて少なかるべき

殊更に偽らるるにあらずとも足らぬ事より同じ結果も

とにかくに足らぬ人ぞと許すべしあしきとまではよくよくならでは

平静にあざむかるべし少なくとも大なる人の面影やある

餘裕あれ力ありなば他へもと要に應じて心の端々

よき意見出したりとても行ふに力なければ皆無なるなり

自らと走り傳へて大勝を取りとめられし大將もあり

人を経て命を傳ふる其間にも時は過ぎ去り大敗にもと

大自然まづ賢しとそれぞれへ仕事與へて成行見らる

準備あり時失はず適宜にと實行すれば大平のさた

自發的そを彼の人は一生の實行なども知る人の知る

生命すら愧しながらかの時は他の或處理は其人々へ

方法筋のある様にとともに計ひしが其あとあとを見ざりし我

去る月の今日

若縁映ふ森の谷間には葉櫻匂ふ青空の下

去る月の今日こそ我等ここに來て甲斐なき様に事の初まる

とにかくに方法はあるなり今の世は萬里の外の電交渉も

何となく欺かれたるかともある合はぬ事のみ多く見え來て

欺かれ心廣しと慰めど其境遇にて悲し過ぎたり

返電の誠心なれど結果なし眞誠と見てぞ足らぬと惜しむ

遠しとて身をちぎるごと思ふまじ便談話も瞬き世にと

詞なし纏りたりし人の側幾十年の後の別れは

思へども未だ書きかねし友人に逝きにし人の過ししあとを

誰が爲めに我來にけると呷つのみ爲べきも爲得で憂き日と過ぎて

茲にとて我來たれども甲斐やある用意の程の足らぬがままに

身動きも叶はぬ様の佗住居續く不整の積る憂き日の

我が机品を分たず引受けし判きの程も疑はる我

當然と痛む事のみ多きなり家の組織の變る折には

其道に任せし貴重の書類箱跡形なしと云はれし時を

我が心不安に置きし主なるもの此等書類のことにてありし

其書類貴重の上の貴重品見出し得しは一年の後

一年も心引かれて如何にやと書類の箱の所在憂へし

明かに扱ひ人と本元の無整に貴き心痛めし

ムーズの花見にはと言はれて

花見なばまた悲しみを彌増さむ河に山邊に残る名残に

ムーズ河邊りの名残多ければ花見はせじと三年位は

如何程に我^{わが}苦しむも思ふごと盡して見たし我^{わが}に頼みて

池の邊の月

池の邊の月をと見には行きたれと思ひ餘りて急ぎ逃げ來ぬ

果てしなき森を背負ひて池の上に水鏡する満月ならむ

清けさを水に映して靜々と大空照らす森の上^{うへ}月か

月の夜は家居のものも促され無限の美^びをと出^だされしなり

餘りにも月を賞でにし方なれば思出増しぬ明月の頃

春の嵐

怒る風轟く夜は荒海に揺らるる船の旅人のごと

山と山荒れ舞ふ風の烈しさを今宵^{こよひ}も聞きぬ此住家^{すまが}にて

此響^{こゝろ}あらしの海の小舟にて神やと祈る心地するなり

心配や悲しき事の走りいで心の底を亂る荒れの夜

大風を恐れし向きも叶はずに閉ぢこめられて呼吸も苦しき

大なる堅固の家も安からぬ心地するなり此宵此荒れ

嵐の夜空行く人も海渡る船も思はる目醒め續けて

明 月 の 夜

千々に見る千々に身に沁む月なれど唯一つなり此廣き世に

月の夜は月に縋りて我が思傳へてよかしと遠き子の許に

親と子と遠く離るる身にしあれば月の夜淋し美しけれど

幼時より月に焦れし君故になほ偲ばるるかかる月の夜

月の夜は千々の思ひの重りて果てしもなげに逝かれし方を

今宵また満つる月なり彼方なる我が子と我は同じ月眺る

寫 眞

此寫眞夜宵の作にはあるなれど職の人程優に巧みに

あの方の別れの宴に其館に燈火により寫したるもの

世の中の嫌ひの一つ其寫眞撮れる筈なし自然の様に

瘦せぎすの人にはあれど左程まで弱くはあらず見ゆる如くに

何となく心ありげの人なりと尊く見えむ右手の方の

誰見ても若々しさの彼の方の何時に變らぬ優しげの影

寢前散步

緩々と歸りかくなれば我が名呼び敬禮盡す五人の組

夜なればと装ひ怠る折も折知己の學者に出遇ひし今は

月明に認めて禮す知己の人歡ぶさまの悲しくもあり

深霧の日

霧の日は都のさまも朧ろげに洋の東西分ち得ぬよし

深霧の何の氣もなしに心地よし我居る都を忘るるまでに

窓の側我が家のみはあるなれど總ては行けり霧の世界に

大霧に人の心も物の音も包み隠せり一時とはあれ

迷ひ居る人にも似るか深霧の一足先きも見えぬ今朝かな

おのが智恵力しらずに苦勞する様にも似るや深霧見れば

擦硝子繞へる家に住むごとく心置きなし包む深霧

家に居て資格はなけど船思ふ霧に閉ざさる大海の上

我は今或洋上の船の上^へに朝食をとると思はする霧

物の音を深霧越しに聞く我は樂の包める世にも住むやと

廣間なる二つの悍馬騎士の像夢のごとくに見えそめにける

養ひ犬に餘儀なくされて婦人等は皮の衣に廣間の霧に

薄らぎてまた深み行く朝霧は世のあるさまを語るなるべし

正午にて太陽は其力現はしぬ行き遇ふ人の顔も見え初む

漸おそくに太陽たいやうは照り初めぬ何となく仕事しごとの上うへに勇みいつ我われ

晴ればれと照り初めかかる今日けふのごと我等の意志の張りて強みて

家見にと近くに出でて大雨に嬉しく宿る大寺の門

日に日にと咲き揃そろふ菊の一しほに過ぎしラヘーを偲おもはるるなり

晴れの間とまづ歩まなむ身の爲めに難かたき務を難かたからぬ様さま

新たなる慣れぬ用事に埋れて我を忘るる寝る前よし

寢 前

散歩終へ寢ねに入る時をソワル主のなくなりたりと語る人憂うれしソワル新聞持主

此人とボアンカレー氏と夫人等とジャンベルナルド氏邸いでデナ偲おもび出づ

今日と過ぎ明日と迎ふるブラツセル春夏秋冬と友の逝やきける

故國の友人を偲おもびて

再また會ふと別れし人の遠く逝くあの滞留の短かかりしを

廣 　　き 　　家

斯くも我雜事に追はれ家出せば家も要らぬと思ふ時あり

そはそれと廣家に入りて書付を廣げむ時の嬉しさ如何に

書付に次げる紀念の品物も我忘れてはならぬものなり

近々に家も何もと整はむそより始めむ我が新生活

あの人はあの様にと出でて來むとは思ひ居し初めよりして

事毎に思ひ盡せるあの人の心の底を床しとぞ見る

折あらば禮言はれたし常々と繰り返されし厚き心を

立 　　寄

昔見しアカデミー庭に來て見れば君の仕業も僂ばるるなり

ありありと我がなき夫の面影を庭に階に見ゆるアカデミー

度々來てはカルドは如何におはすやと庭の風情も語り慰む

眼科博士の許へ

今日限りと御會ひは出来ぬ事なれど夏は此處にて過す積りと
萬一と慮りて我が爲めに齒科醫の許に醫より電話を

齒科博士の許へ

飛び入れど醫師の心も人の意も喜び譲り世話しくれたる
計らずも舊知の婦人居合はせて限なく我を慰めにけり

位置のみか優れ名高き人なるが話の端の情に濡れたる

其言々

飽くまでも世の問題を片付けて君は逝かれし務め終へりと
彼の方のなされし事を數へなば御年若しと啣つべきかは
絶え間なく美德を垂れて世の爲に盡しし君の逝かれし後は
汚せりと刷毛探し來て齒科博士我が衣清めて別れ陳べたり

緑の木蔭

来て見れば雨風去りて霧までも薄らぎかかる池の邊の森

時無しと家居望みし我なれど來れば嬉し緑の蔭に

濃き薄き夏の木立の吹き送る風受けながら書讀み耽る

白衣に赤傘翳し茶犬連れ芝生を歩む知己の若人

内を外外を内にと暮し來てやうやく繋ぐ我と我が身を

過ぎて來て長き旅路を君と我今やしばしと別れぬるかな

木葉舟

大嵐眠り拂ひて夜半を過ぐ

夏の森風に捻れて音高し

木の葉舟大海渡る夢續き

残月は空に掛りて一誇

嵐より負けて眠れり八時迄

淋しき森に

淋しさに淋しき森に獨り居て淋しく出づる思出多し

日に日にと消え行く友の多ければ知らぬ國にも住む心地して

思ふまま時ある身とはなりたれど筆の力の子へも愧かし

流るる如き緑の蔭に一時も憩ひおはせぬ逝きにし人は

空を覆ひ緑垂る森の下逝かれし人を偲び續けり

我が務輕からざるを思へども逝かれし方の務思へば

束の間も唯忙がしと打過げど君が日のみは祝ひしものを

年毎に祝ひあげたる日なれども今年は如何に君は何處に

事毎に君が美德を語らねどなす事毎に思ひ浮びぬ

何の言も皆御教の本なりき残ると我を思はれしにや

樂しみはあるべきことにあらねどもありても分つ人のなき憂し

人皆のなすべき事を外國ぐわいこくに病める子の爲め盡すのみなり

都掩みやまふ夕映ゆふばえ色の色合は樺鼠はなげ青と赤と紫

外 國 　　に

此知らせ去年こぞの夏にとありしなばうれしき事もあられたりしに

世の中は惜しき事のみ多きなり後々のみと廻り來りて

右へ行け左と言はれ幾十年導かれつつなほ足らぬ我

寄木よりぎのごと生きて來し我なればことごと難がたし迷ひ來りて

如何にせば我暮し得む外國ぐわいこくに其國振りを深く知らず

空を屋根草をば床とこと此頃は羊の友となりて生き延ぶ

心あらば犬も御伴ごばんも要らぬなり谷より谷と巡り歩みて

吹き寄する風の薫りに亂れ咲く野茨のげしの原へ我は行き着く

深み行く黄昏時の思出を知るや知らずや窓下の花

小 雨

御國へと荒れの夜さへも出られたる方を偲べは小雨位は

荒れの夜も厭はず心練られたる君を偲びて我等歩める

何の窓も燈火漲る寄宿部屋希望に満てる人等思ひて

ミランよりの三つの大ビュス寄宿舎に夏の集ひの四方よりと來ぬ

深 き 森 へ

何處もかも皆居坐りて木の蔭は場處なくなりし遅く來し爲め

幼兒を抱きて日々と乞食男は森の木蔭に我子慈む

拾ひては集めし紙を一焚きし又も集めて日を過す人

瞬くにソワギの森の奥々に自動車ならで一日の旅

またも我立樹の圍む山の上に君が頻りに書きたる場所に

場所といひ山も立樹も變らねど我のみ變る君なく來りて

三度まで落し壊しし目鏡の縁全く接げり原のごとくに

御命も斯くもありなば世のためになほも爲さるる事の多きを

夏の日と思へば寒し秋の日と喜びて經む八月の月

毎日と確かに世事を知りながら章を味ひ習字もすなり

幾十年用とてなさぬ人なれば或心懸も入用なりと

日に日にと心碎きて子の爲めに計り續くる癒えむ爲めにと

近頃の學術進歩必らずと全癒を見るの日あらんとも

我が生命なくともがなと思ひしにあらねばならぬ家の悲しさ

濕り來る森の冷氣に驚きて急ぎ歸れば夕の六時

森と城左と右に眺めつつ夕日は隠る朝日のごとに

満 月

森の邊へ急げと月は忽ちに雲のまにまに大學の上

夜深く待ち得る身にもあらねばと思ひ残して家路を急ぎて

なき人の好まれたりしバタフライ聞えて悲し森の池の邊

夢

横縦に吹き上げ來る風のさま空の亂れの今か今かと

昨夜見し彼の子は姿美しく優しき心話し續けて

昨夜見し夢の現に表れて暫なりとも見まほしきかな
昨夜見し夢の現に彼の子等も我訪ね得む近き處に

學中の子等に

祖父上にならひて君等朝夕に學びの道に心深めよ

雨後の月

洗はれし空に月出づ淨げなり心の雲の晴れしさなる

月は美し眠くもあらず終夜眺め盡さむ満つるさまをば
美しと眺め盡すも意味浅し復と待たなん來む明月を

縫

残月は鼠色空に金色に今はと別る朝てふ友に
今日もまた雨空眺め故郷の池邊の花は如何にありやと
薄暗く筆も執られずウブラージュ開ける氣にもとなり初めぬ我

縫法の運針も知らぬ我なれど心のままと描きてし花
難き事に心治めむためにとて線も引かずに縫ひにしなれど

祖父上を偲びて

故郷の花をと我は縫ひたれど業拙くて我は愧し
日毎にと眺め續けしラヘー花縫はれて残る昔語り
ラヘー花世の憂さ知らず盛りなり我が縫絹の花園にては

此花も末長かれと祈るなり孫等の後のちも其後のちとても

縫自作補足をのみと思ひ込み危く出でし帽子なくして

老人おきなの老いたる妻の手を取りて雨に雪にと散歩重ぬる

小車こぐるまの方針とれる老人おきなは日毎に犬に曳かせ廻れる

眺めむと尋ねし月は大學の上うへの雲間に現はるる今

今日の月しん之繞形ねうがたの雲の上うへに坐りて眺む盡きぬ宇宙を

師の君

雨晴れて空は清きよかに月優しまだ明けやらぬ朝雲の色

あの士官日に日に連れて二人子を勤めの途次みちに學校行ゆきへ

夜晝の分ちもなげに勤めたる君が子送る姿の見ゆる

富井先生の逝去

朝毎に御寫眞拜し出でられし君も師の君も遠く逝かれし

氣を轉じ心強めて勵まむと仕事を捨てて郊外に行く

ふと往年の伊國トスカナ邊の景浮びて

ウンブリヤ小山に似たりソワギ森引きて續ける夕日のもとの

御國の菊

滿面に太陽の打つ波の原を見て心は飛べりエヂプト邊へ

寒さ毎縁深めて勢いづる菊の花咲く時は來にけり

日を數へ花咲く菊を待つ心待たるる菊の其心もと

海牙に残したる菊を偲びて

種子よりの御國の菊を分けたるを友の園にも咲きたるかとも

濃き色の菊のみ我と越ししかな我慰むと今ぞ咲き初む

此花につきても深し我が思ひあのバルコンにあの書齋にと

不思議にも濃き色菊は情ありや咲き初むる花に人の引かるる

秋來ては菊は咲けどもいと悲し愛でし主なし我が家のさま

きかぬ人菊をコロヌに載せにけり一鉢なれど嵐に負けぬ

或 日 曜

美しき都の端も一眼界日増しに進む落葉の頃の

晴ればれと見ゆる御寺の庭景色人も鳥もとアクチブのさま

びしびしと押しつめ居れど落ち著きて順をと待てるトラムへの人

あせれども未だ探し得ぬ我が家なり春より夏と秋も暮れ行く

ベ ト ー バ ン

荒れ募る秋の嵐の轟きに忘れし夜々の春の夜偲ぶ

鐵骨の家にはあれど大波に打たれ續くる船にも似るかな

繰り返し襲ふ嵐を氣になして安き夢をも結ばぬ夜かと

復も來ぬ夜半の嵐の恐しさ喜ぶ人もあるかなとふと

ペトーバン其人ならば忽ちに大荒小荒を一時の間に

荒るる程心動きて勇み立ち荒るる世界を樂の心に

荒るる夜も靜々外に世の動き風の心も其友に君

荒るる夜も君は出られし靜々と養ふためかなほも心を

漁夫等にも寄り慕はれて熱もたる海の話も聞かれたる君

トーサン (御盆)

眼醒むれど總て音なしやがて來し物賣人に時の知らるる

偲ばるる炎の如き秋の色此カンプルの森の真中に

薄く濃く埋む森路を辿り來て鹿や木鼠やと秋を仰げる

大學の壁は何時しか彩れる濃き錦にと包まれてけり

撒き散らす色の木の葉の庭の面オリヤンタツピー敷き籠めしごと

錦染む朗らの空に花持ちて墓へ詣づる人々の群

憂き人の足弱々と憂き衣に若き子等にと護られて行く

清美なる心映すや尼方の素振の若し年は老ゆれど

窓開あくれば瑠璃色空に三日の月昔見たりし南佛のさま

今日もまた我が子の病如何にやと電話を懸くる嬉しさ覺ゆ

文々に思ひ續けし其ごとく氣の引立たぬ事もありしか

胡蝶の色

時來れば強き菊にも命ありや色も香も秋と去り行く

朝よりと書見しよ續けば手足まで固かたまりしかとカンブルに行く

我が歩むカンブル庭を動かすに眺め續くる人のありとか

六階人びと此方を見るにあらずして食後のタバに耽るのみよと

時折と晴れの廣間に子供等の舞ひ舞ひ合ふは胡蝶の色

休戦の朝

水色の暈ぼかしの空に静々と消え初めかかる残る月影

世を眺むる月は残りて城の上に守り續くも明けぬ都を

幾十年思ひは深し大空に何處も同じ月を眺めて

滿つる月空に残りて物深う世を見渡すや休戦の朝

美しや東と西の雲の色晝夜分目の業わざ嚴いづかしき

月あかり自轉車乗りて人の群むね早や働はたらへ急いそぐ早朝

眞向まへむかに城は朝日に打たるれど月は残りて藍鼠ねずみ空に

落つる葉に痛み覺ゆる此秋來去年の此頃偲おもはるるのみ

見る限り秋の溢るる自然色世界に稀れの武府の郊外

今ぞ今太陽は照り初めぬ森の路錦重ねて歩み忘らす

秋風に漂ふ木の葉地に空に思ふがままの繪を描きつつ

寒からぬ木の葉の嵐衣あざなに染む包む錦の故郷の意知る

續き來る谷より谷の芝生の上金泥塗りし錦葉の雨

何處までも茶褐の道に黄と赤の秋の葉降りて綾を織りたる

あゆみては驚き見るに我等のみ蹈みゆく秋の枯葉の音なり

巡り人二人揃ひて夜晝と街の角にて伊太利館守る

君なしし朝の御勤思ひなばいかでゆるめむ我等心を

暮 秋 よ り

そろそろと心を見する森景色

自動車^{自動車}が吹き立つる木の葉雪のごと

主知らずカトルズ式の家なれど

秋暮れて家の風情の増すもあり

男親子守るとは世の憂さを

落ちきらば掃除せんとて秋の庭

一步み空氣あたらむ人待つ間

梅擬實うめのごじやくの變れるも土地柄とちがらや

音無しの夜半の寢醒は深み行く

茨はつの木の切られて待つは春日和ひより

冬休む草木のさまも美し

設備なき家に働く不成功

探し物に暇を取らる佗住居

難事なんじには静せいと君とに學びしごと撓なげまず進すすみ要えらを得るなり

バルコン

明けぬ間におのが勤めへ自轉車に朝の氣満ちて急ぐ人々

大降おほりに唯一筋と勤め人時をと急ぐ電車は來ずに

四階なる我がバルコンは何もかも人の心も映うつし得るやと

吹きおろす雪も嵐も雨も美し山の腹なるやうの我が家は

犬養が五つ黒犬引きながら身を外套に足の先まで

官シクリスト時違へずに黒トンビそろひて通る我が家の前を

なれぬ仕事

日に日にと慣れぬ仕事に見習ひて悲しくもあり天にも謝す

世の事に慣れぬ婦人の仕事して日々と學び知り初むる事

鐘の音の響に價値を知らるること知られ知らるる君がみ業も

端なくも彼の故郷の山と月水に映ふさまを夢みて

世は動き車は動き人動く正午の景の武府の中心

寒さうに今日は見ゆるなり若人の其靴下の夏のままなる

足長く眞鶴の脚の其儘で集ひて歸る少女子の群

時來れど家にいらすにジョサハ(公園)へともと知る鳥の群を見に行く

公園椅子霜の敷物敷きつめてあら美しや正午の景の

霜の置く眞赤の橋も鳥脚の跡のみ残り寒さ知らるる

シヨコラ屋もギギヨルの家も開け放し來る初春を待つのみのおさま

松竹も氷る寒さに勇氣振ひ夏の心を示すとも見ゆ

のそのそと歩く癖ある我等まで唯一呼吸と小山を登る

白鳩も遠く飛ばずに群りて彼等の家を固め巻きあぐる

違ふ色の鷗集ひて四方山の會議をすらし世にも例へて

氷らざる池の一隅中心に四方の鷗は壽府の眞似する

楽しげに泳ぐ千鳥の一群を羨み語る老の二組

降る雪も氷れる霜のその如く粉の様にも衣にかかれる

路傍の石に腰掛て老人はスーブを啜り人に眼はなし

新兵の太鼓のままの行進には言ひながら寒さうに見ゆ

とやかくと過す其間に故意なくも罰金までも課せらるる事も
取り急ぎ手紙を出してあやまらむ廣告なりと要書を芥に
讀み初めて分らぬ規則知る迄の時の経過に驚く我の

土曜日の夜

初めての雨外套を買ひ入れて晴にも着たし子供のやうに
雨外套其要知らず今日迄も幸ある身とぞ思はるる我

降る雨に恵まれて清き散歩道養はるる群の汚せるあとを
用なげの我等にてさへ土曜日の宵の心は春の日のごと
時々と變るもよしと膳部にも心深くも供ふる人の
彼の好む不消化物をも調理する其心知り可笑しくもある
歩くままアパートの電燈消え行きて三つ四つ五つ残る星のごと
さ夜中も喋々す側の人サラベルナルドの聲にしもあらば

卷糸を繰り出すごとく語る人言ひ出る事の道理も多し

月見えつあら明月と開け放し光も入りて寒さも籠りて

寒　　き　　日

我ながら今朝の散歩は一通り相談せねばならぬ寒さと

出来る丈下着重ねて出でて見む今朝の寒さの常ならねども

昨宵こそ外出もせずには彼と我亡き方語り夜半の頃まで

そがために眠も悪しく遅くまで種々の世界を儻ひにけり

去る年の正月二日の夢の意を語りて思ふ昨夜の夢を

零もぜろ其下々の寒さ故我が意も撓み可笑しくもある

終日を太陽は見えねども大空に赤青黄やと雲の彩どる

人間の進み未だし中々と分らぬ事の惜しき事のみ

隠れたる徳にも似たり太陽見えねど其蔭々に總て皆生く

外國に事なく過す我が身の上事のみ多し心の底は

雪のキャンブル

寒けれど吹雪に遇ひて山中を歩む心地のキャンブルの庭

キャンブルの眞白の道を惜し惜しと踏み初めながら四方を眺めし

人無しと安き心か巡り人全く棄てり雪のキャンブル

見渡せばスキスの山の樹々のごと氷の花に景色添へたり

美しき雪取り上げて玉造り家路忘るる幼學生

何時の世も何處も同じ時に觸れ自然に興ず生くるもの皆

赤傘を翳して雪路歩み行く女の子等の目に立つ廣間

廣間の冬

我が住居名に負ふここの世界街廣間は聳ゆ四階の上に

一年の三つの二つも雨降りの國に住むなり北極を思ふ

朗かに木の芽も萌えむ春景色瞬く鼠の冬の深みに

一色の鼠色空の上も下ももの柔かの冬景色かな

長閑なる南佛海邊のその如く落ち著き晴れて照る日となれり

四階より見渡す人に物皆に美し振りの外見のみぞ見ゆる

編みものに子等の行方も忘るるごと廣間に集ふ若き母の群

弱き太陽の浸す廣間に小學生手に手を取りて踊る美し

北歐の暮れ行く年の淋しさを踊る子等なり賑はしきかな

静々と歩む老僧もオートには氣を配らるる様の痛はし

花賣りの詞の慢き其詞外國人と思ひ知らるる

アスハアルト廣間に集ふ豆自動車子供的主人飽く時もなし

春思ふ色雲見せて終日を照ると勇める廣間の人出

此日和四方の話も廣間にとピーブ連中椅子の占領

此邊都の中の都にて四方の隅より人の憧憬るる

物皆の心知り居る人のごとし廣間に尋かむ人の行方を

冬の日和

鳥群の小枝に懸るその如く園の石の上人にて黒し

春にても稀なる日なり子供等の群れて集ひてカンプルの庭

千金の譬も輕し春のごとき暖かの日や北歐の冬

昨日まで雪の達磨の子供等は砂の山をと急ぎ競へる

昨日まで雪降り積る冬忘れ日向の石に人の足袋接ぐ

今暫し思ひ重ねむ石の上に雲を眺めて遠き彼方へ

飛び舞へる雲の行方を見ながらに午後のプランも定めなむかとも

歸るべき時は來にけり復となき春日のごとき空に別れて

家に待つ人の心の美しと惜しむ日和を輕く見て我

今日の日や未だ來ぬ春を來し如く心は輕し衣は重し

美しと心とらるる自然色正午の鐘に慌て立つ我

愛らしき小文

春の日の夢醒め眺む雪の朝

支度間も待たずに曇る今日の空

雪解の春日と我は偲び行く

泣きさうの空を眺めて歩きたり

雪解の春日のさまに似たる朝氷の道路の昨日忘れず

愛らしき小文次ぎ來て胸痛し

日に日にと心籠めたる文來なば我が生命をも如何にと思ふ

冬の夕焼

西の空火の湖の幾つもと湧きたつ雲の炎の中に

黄金の流れのままに雲の峯雲の河をと映す夕時

西方の炎の海のそが中に萬峯見えて黄金の雲

雲よりの峯と山もと漲れるそが皆流る炎の海に

太陽の夕に四方を彩り隠れ行く其様偉なり偉人のごとく

クリスマススの翌

クリスマス宵の明日は何の家も戸を締め籠めて真夜中のさま

犬に引かれ餘儀なくされて少女等は寒き廣間を左へ右へ

目醒むれば心は出でて遠くへと故里人を訪ね始むる

我が心幾度離れて日に日にと我が身を捨てて遠き彼方へ

子等が子のかきとおこせし繪の束の不達と知りて悲しきは我

昭和九年十二月廿八日

點々と山家の如き燈火の殖ゆるがままに朝や見え來ぬ

世を知らず太陽出づる前の其騒ぎ風に嵐に雲の動きに

ほんのりと太陽は照り初めぬ一齊に動き亂れし大空何處

身は茲に心は飛びて朝毎に畏み拜す彼方の空を

朝よりと心を籠めて忙しく居ましし如く我は過ぎ行く

御在さねどおはすが如き思ひして我は行くなり御言のままに

ミモザ持つ人の行くにも思ふかな共に眺めしバルスローヌの花

有難き御品々は殊更に高き段にと供へ盡して

何かにと心盡して我と我飾り供へし御靈の前に

何となく心安けき心地せりあらむ限りを君に捧げて

皇國へとありし總てを盡したる其靈前に 貴き御花

有難くおこし給ひし御花は御國の花の櫻の花

御國花辱くも我が家に高き香りを限りなく今日

美しき心も身もとなれる子等逝きにし人に語らまほしき

浅からぬ四方の心を読みまして残る隅なく君が心に

花に埋む君が御前に畏みて友の詩文を読みにしは我

巴里よりのバカテルの葉書にて

バカテルの庭の小隅の石の上に勵み書かれし面影の見ゆ

書き出せば思ひは湧きて瀧のごと堰き止め難き今宵此筆

冬の森

氷るとき霧にはあれど春霞棚引く朝の心地して出づ

斯かる時氷らぬ道を通り行き冬の心を森に聞かまし

カンプル庭廣間の芝生花のごとく霜の包める朝ぼらけかな

霜解けて物皆緩み人脚も緩らに見ゆる朗らかなの氣や

若人等歌ひ續くる冬の森春をや歌ふ鳥のごとくに

飛雪

荒れ寄せる群雲の如き此雪は學び通ひの幼時に似る
飛び亂れ渦巻く雪を樂しげに故郷の空を幼時偲びて
不揃の屋根より屋根と限りなく向うの岡も眞白の衣
枯木まで花に装はれ何處とも果て知りがたき白妙の海
見倦きたる枯木も今朝は美しく北極景の眞白の空に

バンキーズに乗り居る人の心地もて一足づつと我等歩める
降る雪も春の花散る風情かと思ひながらに過ぐる外國
降る雪に傘さし掛けて夫と婦と家路を急ぐ子車引きて
玉の雪散り飛ぶさまの勇ましさを見とれて歩む廣間の燈下
雪重む傘を翳せる其疲れ覺えて寝入るおかしくもある

公園の芝

冬の野の枯木に残る赤實のごと並木に残る夜守の燈火
暗けれど時は時なり廣間には人の集ひて蟻のごとくに
養ひし効あらはれてパークの芝日々青々と小花咲く冬
時遅れ氣の毒さうにあの生徒寄宿舎外でクラバツト附く

朝の月

大荒の通りしあとと驚きぬ知らずに過ぎし深き一夜と

長き夜の大雨知らず朝の月世の美しさ誇り顔なる

明けやらぬ空の向うに朝の月都を守るの心見せつつ

何もかも空も眠るか穉き寝顔守ること月を眺むる

霧の夜より

寄する霧燈火流して尾を引きて續く奇形の幕星のごと

夜毎に竝木に見ゆる大燈火今宵は遠く星のごとくに

外行くも効もなからむ家に居て夜を過さなむ楽しさうにも

深霧の寒さの募る夜ごと夜ごと君の好みし書披きけり

十時過ぎ眠り付きしが九時間を一寝に過ぎて晴天を見る

斯かる時子供の様に彼の庭に遊び盡さむ照る日の下に

珍しく照る日の恵む今日なれや行き交ふ人の氣配優しき

年の暮に遠き娘へ

兎に角に送りてやみむ我が思ひ今朝はと出でし一時の間に

繰り返し皆安かれと強かれと祈りて今日も筆を執り初む

新聞不來

來て居れば左ほど値は分らねど來ぬ朝淋し新聞なしには

暗あゆむ心地に人を馳らせて新聞買はせ我と落ち著く

電話したれど

呼ぶ時に使ふ人々そろはずに事の次第の流れ過ぎ行く

假住居未整

我が家は書くに机もなき故に思ひ消え行く時もあるなり

とりあへず飛行機調べ待ちたれど機會は失せし二週の間

書き陳べて思ひ通はすすべあれば人は幸なり親鳥思ふ

世界より集る同情其人の後や暖かし寒からず子等

病める子も心籠めたる扱ひに楽しきさまにウキラのパークに
遠くへと旅出のさまの盛りさを逝きにし君に見せまほしきに

我が寫真近く送らむ喜ばれむ未だ若々の祖母さまかなと

慕ふ人の賞でしメロデーを唄賣りは續けて流す軒の木蔭に

これといふ用事とてなし暮らしくありたきものと彼等煤拂ふ

羨まし左と右と働きて坐る間もなき彼等の仕事

我が涙乾かぬ中に慣れし家離れて茲に君が一年

父の徳母の心を知る病む子楽しくあれば我も楽しき

往年其父の在墨公使の初年、其國の内亂に死せりと夜半過ぎ弔ひ來りし記念
となる書齋にありし彼との應對につきての記者の言を

責任感の態度詞の貴きよと少年などと見られぬ少年

其當時の新聞の發表を偲びて

感情も貴かりにし英才にて一高入りは第一席に

立派なる時計のごとき人なれど滑り轉びし小怪我のため

親よりも立派になれる人なりと時は時なり今の此世に

遠き方を悲しめまじと我等のみ勞り盡す年より年と

日に日にと癒ゆることのみ希望にてそを待ちたりし年は經にけり

第一醫第二の人もみまかりて第四が主に第三を助く

年老いし祖母さま方も頼もしと春を語りて待たれるし孫

御心盡しの數々の一二を

庭の花咲き初めにけり此年も孫なく眺む我等のみにて

春の花咲き揃へども見せがたしこがれ焦るる我等の孫へ

少年時繰りかへし我子の言を左に

母様よ學ばるる事よされまし我は盡さなむ望まるるまま

シベリヤの冬野に雪のなきごとく深き憂に涙さへなし

根の病持つ木のごとく我が心悲しみ深し癒ゆる術なし

問題は諦め居れど疲るれば悲しみも出づ我を離れて

要に速み身を勞るの暇なく務め盡しし後をぞ思ふ

去る年は天に守られ身を忘れ我を忘れて盡し遂げたり

子に捧げ君が心に仕ふる身と思ひてぞ勵む健康法を

感情を動ぜぬ爲めと心して月に二度のみ見舞するなり

通行安全を希望して

カミヨンも何も休める日曜に我が身思ひてあの子の許へ
心正し身を強くして彼の子ゆる百歳までもと祈らるるかな
逝かれたる歎きの胸に迫れども我は慰む君の御業に

夜の雨

雨に濡るるその街々は赤緑電燈映り虹の道敷く

電燈の虹に映りて大街の雨路の光り天の川のごと

憂けれども又美しき並木街雨に映ふ七色の燈

平和宮

昭和十一年（千九百三十五年）一月三日、平和宮に於て國葬にと和蘭國の選
ばれたる昨年の今日を偲び、やうやうと遠き子等へ

暫し我安かれかすと目を閉づれどシネマの様に見ゆるあの式
おこし來る厚き心を読み集め力つきつつ御式にぞ出づる

君といふ君知る方の眞誠心も熱きものとも文字なくとても

小暗くて空まで似たる今日の日を樂も聞ゆる式も皆見ゆ

御式は平和の宮に國葬に世の心をも花も集めて

集ひ來し人の心の重しさも清き式たる意味を強めし

會よりも國の元首も國政府友もおこしし花の積りて

主權者と政府聯盟勞働も御人を式に平和宮にと

御勅使御下りありて數々の御賜物をも拜受此家

御使を家に式にと重ねらる君主もありにしおぼしめすま

御式にと平和宮にと皇國代武者小路大使獨國よりと

深謝せり有田大使の遙々と隣國よりの臨場ありしも

公務にとわざわざ寄する文もあり皆沁々と感謝重ねぬ

文なくも心徹れりまた我へと君がみ業に君知る人の

眞先に和蘭外相讀みあげし其言其意涙して聞く

國際の法廷長もよく陳べぬ眞誠失せずし事を明かして

嚴かに國際法廷グレフイエの讀める經歷其當時の見ゆ

世界より國と勞働二代表盡きぬ敬愛君がみ靈に

樂の音も御徳を慕ふ心地すといはれし言も今日も思ひ出づ

樂の音に慕はれながら御車は騎馬の隊士に守られて出づ

樂の音の消え行くままに平和宮君のみ靈の遠く逝かるる

深み行く淋しき霧に導かれ樂の音凄し清し崇し

平和宮墓地の間の遠き路人悲みて埋みたるさま

墓地にても人畏みて情滿つ永別詞讀む國際法廷長

見えねども道を盡せる人々に神や守らむ子等の海牙に

家族代武富公使謹讀し和國に禮を花の墓處に

プーブルの墓地にはいりて弔詞陳べ我が手求むるむきもありたり

シネマにて幾度所々にかかるさま見せて続けし和蘭の國

言　　波　　——人々の語れる——

此方の逝かれし爲めに世は動き花も降るやの思ひ續くと

深けれど底の底まで清湖のスキスのそれと君が心か

慕はるる冬の日光のその如く功績重ねし方の御後を

人の心樂の心と唱和して慕ひ続けし式なりけりと

宗　教　者　の　言

絶え間なく美德を垂れて世の爲めに盡しし君のありか知らると

流るごと無数の仕事同じ間に治め盡せる君が力は

静々と君が爲されし大事は何處なりとも後の世待つかは

君逝けど逝きしにあらず其みわざ我等の上に道を示して

おのづからよくも持たれし彼の方は道の望みし徳の總てを

近き人へと

カトリック偉き僧尼の業尊し野蠻の國に悪しき病者に

彼の人等身をも心も人道に固め盡して信念の爲め

父人のなくなられしに悪化して動かし難き今の有様

病める子を勞り守る一筋は唯當然の事のみなり

一人の子一人の母の思ふまま盡して見たし限りなきまで

愛されし此子につきて我が身とて何どて劣りのありてあるべき

我が心堅り居れば安らかに無事のみ祈り給ひてよかし

御國へと總て捧げし彼の人の事を思へば我が身拙し

北歐に獨り残りて幸あれと病む子の上を祈りてぞ寝む

人は皆流れは同じ或方へ心は安し彼方の空へ

樂しき歸航を希望して

限りなき長閑の海の船の上に見ゆるや見えぬ雲を仰ぎて

隣屋の普請の音の燥しさ焼ける暑さの蟬にや似たる

幼き折の庭

夢にだに忘れかねたる故郷の涼しき清水庭を流るる

次ぎつぎと風邪の入り來し歴史より皆更まり幸のみあれと

日に日にと用は積れど花見舞ふ時は惜まじ我を忘れて

御心の尊き筋に依られつつ幸多かれと祈るのみなり

御心の厚きが程の身に沁みて月を重ねし筆もとられじ

日に日にと思ひは積みど我が心動き續きて筆は動かす

文書かず待つ心なく暮し得ば遠く住むとの思ひも失せなむ

ア
ボ
ネ

アボネ來ねば急ぎて買ひやりぬジュル、デストレの逝くに驚く

電話にて或友の許に

喪に痛む我此身にて如何にして悲しむ人を慰め得むや

とりあへず

花のみとなき人まつり残る人慰めてはと友の勞る

さはさうと車電話に呼びたるに取次人の忘却を知る

花屋主人入り來る我に泣き付きぬもと保護したる婦人なりけり

美き花を美き色取りと心入れ花の装りを主人急げる

ふと入り來る友

出來たなら我持ち行かむ君が爲め我等の友の悲しき許に

力なき我也行きたく思ひ立ち車飛ばして彼方の家に

花に埋むる人とはなりぬ此頃も共にデネせしあの友の許

夫 人 を

慰めに行きたる人は先づ泣きて甲斐なく歸る其人は誰

目醒めて遠き子へと

目醒むれば先づ筆とりて我が心寫す鏡を覗きてぞ書く

御國よりの緑茶いただき緩々と出づる支度を整ふるなり

朝茶後は歐字新聞開き見て知識者風に時事を知り置く

事はよく知れば知る程興深し日々の學びの眞面目にあれと

幾度とよき文章は味ひて尙ほ音讀も試むる我

分らねば字引と急ぎ究めては嬉しく愚ぶ幼き折を

何につけ足らぬ人よと見らるるはそが罪なりと人には罪なし

御國への大なる事は外國の新紙は競ひ重くのせぬる

委しき事は週に二度來武の邦紙開き樂しむ

急いそがしき返事を済ませ何くれと生くる世界の用を片付く

佛字にてもかなりの意志を陳べたしと心用ひて考ふるなり

我が食事身をば守るを第一とし口の主義には構かまはざる我わが

身に善よしと思はば何も皆美味に我が此主義は昔よりなり

強がれど心走りて筆の上へに弱きさまをも跡留あとめしにや

集めたる用片付くる其爲めに週に一度は中心に行く

夜の爲めに良き空気をば體からだにと楽しく出づる寢入ねいりの前

朝もまた寢起きのままに家出でて世の動きをも森の景色も

滑る道心用ひて歩くのも世を行く道の注意とも見る

さはいへど危あやなきことは慎みて寒さも計る出づる前には

喪中ゆゑ心と身とを研たふのみ益えきなき事は總て忘れて

我が家には電話はあれど我がために専用品と番號隠して

一 昨年のクリスマス、遠き子らへと

やうやうに力も出でぬ書く氣にと一昨年のクリスマスをば

整へよ見易き様に書類皆あの部屋にあの向きに

晴ればれと春日來らば我出でむ務め盡さむ事多き世に

此得たる新生命もてなほ高き事にやなほもあたり盡さむ

何時の日も體の變り説き聞かせ醫師に容易く研究せしめし

佛語なる其美しき詞にて最後の日まで説かれし君は

取りあへず心のカドー鏡かたよりと直し使へと君が名刺を

一と通り揃ひしカドー眺められ廊下の散歩続け語らる

髪なども皆整へて御顔おんまで寝りの前に支度されたり

我が病ま全く癒えたりこれよりは暫し休まむ此暮の間は

明かに癒なられたりと我々は夜を日に繼ぎて力増しぬる

去りて逝く其間近まで御國へと世の爲めにもと身を厭はれし

一筋になほる思ひに配慮して食事さへすら控へられける

何時とても美味を感じて進めども後の爲めにと判断されたり

其 翌 朝

御眠りの續きてあれば御静かと夜の看護婦は云ひ残しけり

我近くも忘れぬ日なり今日の日や君安かに寝ますと朝食を

人々に静かにあれと看護婦に鍵かけ貰ふ廊下の端々

程過ぎて有經驗の看護婦は長しと憂ふ寝ませる様を

眠りより他の眠りまで行かれしと聞きて驚く我は我なく

看護婦等其道故に安けれど我等愁しむ身も世もなしに

雪 兎

サンモリス其雪山のガラス家に光線あたり居るとカンプルの岡

雪兎作れる子等を眺むれば母等の笑める美しき顔

斯かる日に雪積む岡に來らねばスキスに行きし思ひなかりし

山沼も溜りも出來て雪解の一と日のさまの都忘るる

用一つ終れば直ぐに外々と力養ふ萬づ思ひ出づ

孫 達 へ

取り急ぐ用事なすにも机の上紙の整理を先と急げる

私の仕事重なる其折は字も亂れ果て愧しく思ふ

便りごとに進みもて行く事知らる筆の上にも思想の上にも

遠ければなほ偲ばるる祖母が上と小さき子等の筆の床しさ

御身方の絶えず勇みて學びたる其後に來る正月聞かまほし

若櫻咲きて香ふと君が家正月休は殊に美事に

佛學は如何にせしにや大姉様暇つくりて續けられては

歳暮と深く心を配り居る市の有様を我に映して

處變り物皆變る思ひして眺めたりとはさもあるべきと

御美しき御歌の心よく分り御庭に共に雪達磨見る

花も可くピアノもよろし學問の益あることを續くる間に

美しき筆にはあれど心して習ひ置きなば楽しみ増さむ

母様の手に似て來ぬと父様の御褒めありとは我も嬉しき

御願ひは近き中には母様に御手紙あぐと申し出でたし

小姉さまに對へもし得で祖母様は日を過しつ々暮は來れり

小姉さま偉しと思ふ講學に高點採りし語學校出で

大兄様春風の帆舟のごとくすらすらと學びの道を辿るや君は

中兄さん全甲なりと御目出度し身をば大事に學び行かれて

小兄君一呼吸さつと勤めなば全甲なるは疑ひもなし

母様と小兄君の御文にて御話し居る心地する我

赤ちゃん賢こそうに美しく可愛く見ゆる何時も御寫真

御正月御目出度う皆さんと御雑煮喰べしそは夢なりし

御文讀み其瞬間に撮し得し心の寫眞君等へと今

歌ならぬ歌を送りて御身方に分らぬ事もありてはと憂し

御姉様の御資格にて皆さんに讀んであげてと御依頼します

問はれ來る代るがはるの我等の様皆良く在りと喜ばれてよ

時の経過

子牛をば嘗め嘗め清む親牛の心深きも世の中のみさま

此子牛何時まで慕ふ母のあと

人間の幸幼學苦學講學苦闘にと人々生活を得モラル路あり往く

行く先は何處の家と啣つのみ楽しく住まむ信念の爲め

飛行機は螢の様に空を行く

丸き月紺青空に懸るなり

またも愛づ眞丸き月の美しさ時は如何にや我は過しし

我が時も光の如く走るなり見え得ぬ事をなすのみにても

残 月

樂の音を聞くと目覺めて電車の音世の働きのしるしかと聽く

心急ぎ幕を開くれば残月は城の彼方の大空になほ

ウニズのごと柔かき空に残る月霞む都を籠めて照せり

美しき残月照らす我が部屋は山の奥なる庵にかも似る

残月の柔しげなるに彼方より寄せ來る雲の色恐しき

小舟のごと光る残月雲の間に流れて浮ぶ美しきかな

急ぐ人左と右に月照らす道を辿りて勤め先へと

太陽の出でて霜敷く朝と知られたり零の下故先づ朝餉とる

家 定 め

やうやくに家見出でたり安全地に庭も揃ひて内部も明るし

備はれど其大さのそのみは獨りの我に相應しからず

餘りにも美し過ぎて悲しみぬ益なき飾好むがさまに

世相柄手頃の家は塞りて大な家のみ貸札の付く

九ヶ月も適宜の家を捜せどもこれはと思ふよきものもなし

撓みなく總ての點を比較して限なく強く調べたりしに

己がまま建てたる家もかならずや喜び續くものにもあるまじ

斯くてこそ我は定めたれ廣き家に書類と本と住みなむかとも

天 候 の 變

起くとすぐあらブシエールと騒ぐ人眠る前にも掃除するなり

夜よの間に風かぜの持ち來くる塵ちりなりと知りなば安やすき心地こころもせむ

塵ちり起たつる工人こうじん來きたる其前そのまへに掃除そうじし迎むかへまた掃除そうじする

斯かかる人ひとの側わきべに居いれば世よの塵ちりに構かまはぬ人も安やすき心地こころす

彼かれの人ひと等ら名譽めいよの處ところ違ちがふなりさあればこそ皆みな一いつとなれ

著名しよめいなる上うへの子供こどもの騒さわぎにて時計とけいと眼まなこざむ我等われら笑わらひし

零こぼ以下の七度しちど餘ありと我が心こころ出いづる心こころを抑おさへたりけり

行く先さきの家いへのためにと幕まくらとられ此こゝ寒かぜさにと暫しばし怯おそけし

さりながら毛布けふし用もちひし其智恵そのちゑに終夜ひねもす過すぎし春はるの心地こころに

晴はれなばと支度しど整ととのへ待まちちたれど彌いっや増ますのみの夕霧ゆふきりの海うみ

深霧ふかきりの心こころ置おきなき夕ゆふなればストールなしに我筆われつづとりぬ

霧きり晴はれて暫しばし嬉うれしと思おもふ間に雪ゆき飛とび來きる荒風あらかぜのごと

スキス山やま描えくは難がたし今宵こんよひ月つき漲みなり照あらす大空おほぞら色いろも

張り詰めし紺青空に星ながむ月は詠み得ずスキス山のごと

歸り來て

歸り來て誰に問はまし幾年を過ぐや此家に導かれずに

歸り來て君に問はまし幾年を盡し遂げ得む我等の子へと

幾年と盡し行くらむ分れつつあの子の爲めに此家に我は

玉のごとき人の心の多きかな君の殘しし御業の蔭に

沁々と銑鐵の如き力來ぬ誰導きて我が手とらるる

必らずと聞かねばならぬ事に遇ひ君なく定めし我と我にて

日に日にと心に沁みぬなき君に聞き置かざりし事の多きは

君といふ人の妻たる我故に我が身の不足なほも沁みぬる

君が妻外國住を重ね來て足らぬ我が身の程ぞ悲しき

一年と六月の前の我が勇氣靜かに強く我への加護を

朝毎に緑の色の彌増して盛りの世をと思はする春

春されば悲しみなしと見ゆれども軒のマロニエ思ひ増すのみ

海外永年の春を偲びて

マロニエの芽の出づる頃は故郷の櫻を思ひ涙して見し

櫻花不意の嵐に散りしごと盛りの君の逝かれし後の

日に日にと色めく森の一隅に柳の芽白し春の雪のごと
鐘の音も春の色すと聞ゆなり籠れる霧の晴れかかる朝

美しき人

書を開き住みし都の或さまの刺戟に打たるる時もあるなり
名とてなき野の草花も美しく活けられたりと仰ぎてぞ見る

そが前に敬ひ集ふ諸人の心の動き身の振りぶりの

春雨の恵みの露に緑ます廣野の春の草花思ふ

耕さぬ野原の花の美しさえも云はれざる趣の見ゆ

あの人を此處にて見たし四方よりの花の交りのそが中にもと

何處にも稀に見得べき人ならむ美しさ溢る智的よりもと

壽府よりの初夏の便りに

壽府ジュネフの初夏の緑も美しく昔語るや人を偲びて

天長の目出度き日にと撮られたる其寫眞を御奥様に

机の上の我が友にとの書なりしに御心知らで返上せし我われ

満つる月か

満つる月とまたも今宵も疑はる屋根より樹々と朝日の如くに

寄せ來きたる雲より雲と渡り行き大學塔に懸かる明月

雄大も無限も知らる此月の高く照らせる大空見れば

海の上に月を仰げる心地せり立つ群雲を波と眺めて

空をのみ眺めて心盗られけり

世を離る心地に我等眠りたり

新 家

住み家をば見出したりと聞き知りて友らが寄する花と玉章

束の間もほほ笑みあれと我がために探しくれたるほほ笑む家を

君逝けど君が御徳の残りてや君のありげに我を迎ふる

皇邦へと天の命にと世界的總て捧げし君は何處に

君はなし君が愛でにしあの子をば君がそよりも愛でまほしけれ

不 天

七月の雨の浸せる其憂さを此八月に忘れまほしき

日に日にと太陽の南行く北歐の夏は尊し惜む一瞬

千金の詞も輕し北歐の恵みに滿つる夏の一時

此都空に見ゆる程海山邊人充つるなり雨は續けど

雨降れど捨て置きがたし夏休復と得がたき憩ふ時なり

絶えまなくそが海邊へと心入れ慰め招く友に對へて

今年はと心は弱し友方に悲しき振も見せなばと我

大街に鶏聞けり日の中に里の小隅に佇むか我

がらあきの都に住めば廣くして狭き心の持たれえぬなり

睡蓮は公園なれど花盜らる民衆戦線の世柄なるにや

此處もまたスポーツ流行の結果にや森の奥までオリンピ姿の

晝は雨夜は曇りて秋の様人の心も淋しげに沁む

瞬く間に滿つる姿を一と目見せ黒雲割りて隠るる月影

絶え間なく響きし森の夜の樂も世の哀れにやこの夏はなし

朝の散歩

深山の温泉場にも似るかなと湧き立つ霧の包む庭見て

散り果てし緋薔薇はまたも一齊に咲き初めかかるカンブールの庭

庭の花夜宵の眠りのさめかけて我見て笑ふ朝露の下

朝露に匂ふ緋薔薇の芝生には太陽は照り初めて鳩も雀も

同じ木の花にはあれど咲き方の違ふもをかし世の様に似て

蓮の花咲きては蕾み又咲きて二月経れど色は變らず

限りなき色の草花咲かすれど不調和見せぬこれの家主

驚歎し立ち止まる人夜も晝も花の調和に主の心に

初夏

花見ても見られぬ去年の夏なりき樂の響も涕飲みけり

青雲と續きて見ゆるボブラ樹の其高雅さを我が友として

晝もよし夜の花も美し白桐の雄々しく包む隣家の庭

隣家の庭を掩へる桐の花は青葉の上の白雪のごと

漸くに夏歸り來て薔薇の花炎の様に咲きかけにけり

今日もまた野茨の花鎖風に揺られて波を描きて

ガラス越し食堂内に映る庭野茨や森や草の花やと

家に居て山や原やと盛りなる夏の木蔭に憩ふ心地す

初夏の美を歌ひ喜ぶ若雀砂風呂つくる庭のくまぐま

芝生なる長方形のその縁に飾り盡せるローズのアルク

アルクには赤に黄色に紅に白と連がる枝の重りて

真中には柔かく咲けるカピシヌやスシにて守る秋待つ菊の

空木藤彼岸紫陽花山吹と樺や楓や菩提の樹々と

繪の上手なる幼き子等を偲びて

庭のさま寫し貰ひて花のなき長き冬をも夏と見まほし

居寝りの人を眺めて我ながら羨み續く夏の木蔭に

常夏の國なれかしと北歐の夏に親しむ暮るるも知らで

塙へと鳥静まれば此庭は静まり果てて山奥のさま

去年の今日

あやにくに目醒五時へ用意して人にあたりて邪魔せしといふ

言はれても直ぐには聞かぬ人なれど一日過ぐればよくも實行

稀に世に見る賢人と敬はる朝に聞きての夕の行

空も木も眠り静まるそが中に山の端のごとき森の明るむ

染めかくる薄金色に在所見せ汽笛の樂に昇る朝の太陽

太陽のいでて世の初りと寺鐘の響きて渡る招く様にも

打ち續く汽車の響の絶間なし働く人を送り頻鳴る

太陽の光溢れ漂ふ我が部屋は朝の流れも浸り加へて

一瘦總て忘るる我なれば朝の心は朝のそのごと

朝なれば解くに解かれぬ事さへも清らに定むる心地するかも

健全に生れし兒にて何に一つ惑はぬさまの心地すや朝

去年の今日不慮の御怪我に失せられし若き國母を國は悲しむ

大君に御子に別れて國民に美事の世にも別れ給ひし

温かき人の心に迎へられ國母の御業高かかりしにと

滞みなく心開きて美しき御詞溢るる方にてありにし

盛 夏

窓開くれば深き谷間を眺むかと霧より芽ざす青葉の色

白雲の薄青空に流るる下樹々の青みの漲れる朝

窓よりの朝の流れに浸り居つ清水に住める魚のごとくに

戦ぐ風踊る朝雲静まりて太陽は照り始む世の上

庭隅の南の樹より上る太陽に六時を知りて我は筆執る

向ふなる青木の際に見ゆる家古城の面影さながらに美し

赤き實の梢の後は暈葉とアカジュー色と薄濃き緑

緋葉の隣りの木々の赤玉の夏の實啄く鳥を眺めて

見方にて色も木振も森林の中に坐ると思はるるかな

芝の上も木々の梢も夏の風渡るがままに小波を立てて

暫くは海邊の砂に安らけく夏の盛りを夢む我が庭

夏の花の太陽をと喜ぶさまに似る我等も庭に暑さの中に

照り渡る恵みの太陽にて緑色千々に映せる空を作りて

流れ来る夏の青葉の涼しさを身に受けながら庭に書を読む

夏の風織りなす梢軟かに優しきリズム送り聞かする

色増しぬ昨日と今日の暑さにて隣りの庭も彼方の園も

絶え間なく花訪るる蜜蜂の其眞面目さを眺めては我

北歐の夏を楽しむ其さまは冬をし慕ふ南國にや似る

百花の笑ひ盡して咲けるごと歡び盡きぬ北歐の夏

盛りにも咲き揃ひたる夏の花かくもありたし人の仕事も

日に日にと程よき暑さ廻り來て生活てふの恵みに撃たる

夏風の芝生に散らすローズ花千の利休の趣もある

赤ダリヤ盛り極まり重たげに頭を垂れて考ふるさま

白赤の御旗に似たるダリヤ花皆一勢に小學生のごと

日に日にと自由自在に咲く花も云ふに云はれぬ美を盡しつつ

何が爲めに己が總てを競ひつつ咲くや揃ふや夏の諸花

南佛の空色借りし北歐の花に酔へるや庭の黒鳥

日に日にと赤るみ熟る夏の實を目指し訪るグリの群

カビシヌ

手を取ればわるびれもせず延び延びと咲き揃ひ行くカビシヌの花

生れ付きのよき子育つる思ひして心配りもなげの此花

黄と赤の色味を籠めて咲き揃ふ庭のカビシヌ緑の中に

石の塀の緑葉照りて彩れる其まにまにとカビシヌの花

カビシヌの蔓の歩みの綾なして所狭しと彩れる美し

カビシヌの蔓より蔓と垣繞ふ其氣も色も優に美し

蔦藤の緑の暈す高垣へ黄赤の花の飛びて交れる

我が發意叶ひて競ふカビシヌのガソンの圍りローズの邊り

咲き揃ふカビシヌ花を日傘のごと護る丸葉の風に流るる

カビシヌの氣高き振りの其様は撓まず延びし正義のごとくに

遠き子に

種子採りて君に送らむ來む年の御庭に武府の花見られよと
優なれど強さ籠れるカピシヌに倣ひてやみむ我が行動も

今朝も亦手向けて慕ふ逝きし人知られてしがな手作の花

エヂプトの夏

エヂプトの夏かと騒ぐ今日なれば惜しみ盡せと車を森に

瞬くに空突く森の木の下に涼しき風に心洗はる

自轉車の乗り廻す人も森のごとく清らの氣にぞ満つるなるべき

一度と自動車來れば演習のごと砂の煙の雲をつくれる

森の下オヤツ忘れて山の氣に聲のなき程打たれ初めし

ピスタツシユ探してあげむ取りあへず木の實も採りてあげようと云ふ

さはあれど鳥にもあらぬ木鼠ならぬ我が身なりとて斷りにけり

隣 工 人

カビシヌの咲き添へ昇り花のなき庭の小隅も賑しにけり

花のなきローズのアルク、カビシヌの綾あやに織られて夢園のごと

隣家となりやの毛織けりの芥かゐを焼きたりと園居そのゐの我等われら怨うらみ始はじむる

しめこめられたりとして

塀かき越えて我が庭よりと外出そとでをと夕ゆふの願ねがひの隣工りんこ人

家 人 は

易やすくして易やすからぬとは此塀このかきの花に埋うみて蹈ふみ所ところなきに

隣工りんこ人等ら素直すなはちに悟さとりわるびれず一軒いっけん先の塀かきを越こえたり

寶 物

幾十年筆執ひつとらざりし英語えいごの文餘ぶんよ儀ぎなくされて或方あるかたへ我われ

筆染ひつぞめて寶物たからもの出しし心地こころしてほほ笑わらみ初はじめし我願われねがみぬ

なにもかも新たに始む邦文までもと知りたりし字をと綴りて

我が力足らぬさまをば嘆かれし君を偲びて學び勵まむ

草 取 人

朝よりと幾十と鳴る呼鐘の響く隣りを無きものとして

使ふ人に暇を與へたれば

誰も皆消え行く身なり業のみは朽ちせず残る限りなき世に

窓の戸を今日は閉ざして世の中に我等も避暑に海へと森に

公園の草取人の我に嘆くを

慰めど氣候の悪しき國なりと今年は今もトマト熟らぬと

日本のごとき

美しき優しき國に行かれずに北歐暮しの痛々しさと

教育かシネマの爲めか斯かる人賢くなれり地理をも知りて

二年前の今日

二年の今日の此日は汽車中に希望に満ちて彼の方とともに
我が願ひ辱なくも完全に取計らはる何處よりもと

稀に知る大暑の風を引き入れて共に語りて心地もよげに

今日の空光線はなくて陶器のごと庭の柳は壁の繪のごとに

公園の朝の薔薇見と出でたれど夜半の雨後はと遠慮し歸る

昨夜の荒れ

幹さへも縊れて振れて揺ぎつつ一夜経たりし庭の若柳

夜嵐に石の花盛すらすらとコロメと落ちて芝生の上に

讀書しつつ我を忘れて時折と夏の心の花に引かるる

三度まで梟の聲を聞きたれば今日の天氣を疑ひ初めぬ

浅青葉赤實縁と葡萄色籠めて圍みて我が庭を染む

何となく苦しき心解け初めぬ盡きぬ自然のさまより見れば

巴里よりの日々のアビヨン我が庭の高きボプラの上を飛び交ふ

アビヨンに驚かされて幾度と慣れし小鳥も巢にと飛び入る

用よりも夏の日惜しと迫られて庭へと運ぶ墨筆文具

遅けれど初めて知れり消紙を斯くも貴重き筆の友かと

暗　　黒

電燈線近處の家の障りより内部も切られ昔偲ばる

家の内部眞暗き夜の襲ひ来て蠟燭といふ星を依頼るも

廣き家暗黒さ満てど落ち著けり晝見し色の飾り浮びて

たをやげの燭の光に食事して心も優しく燈火の様に

恩恵も續けば忘るる人の情貴重くあらむ明晩の電燈

雨烈し出懸くる心押し止めて廣き廊下を街燈に我

今宵もと難有しとぞ身に沁みぬ出来る範圍に身を護る方法知り

國際法學者の爲め催したる招待會に燭光を要せし
事を偲びて

ありありと浮び來りぬグルノーブル、ユリヤージュ城の智者のつとひの

其折の或笑話笑聽中の或言を

此燈火我等導き深め行き心の熱を増すのみなりと

沁々と照らす燈火の我々を廣き奥儀の法の道へと

花の風情も穩かなりし

花とともに昔を語る此燭火法の由來も聞く心地する

穩かの燈火にいとどしめやかに世界の交りの道を深むる

花と坐し燭火眺めてしめやかに世界の智者と語る嬉しさ

計らずも昔に活くる心地せり我等の如き今人等にも

最後の御別れ

年老いし母様とのみ思ひ込み外國行の心失せしに
皇國へと思ふ切なる人と伴いざ外國に我等忘れて

此御詞復と目見えぬ御別れの貴き記念と刻み續けて

書く毎に爪に爪なし爪にはありと母の御詞の四歳の時の

母様の嬉しき御顔見たさのみ日々と勵げみし幼時の我

遠き我子へ

君なれば全き母と崇むれどなほも盡して子等のしるべと

心のみ見られてしがな我が筆の足らぬは總て補はれてと

昭和十三年八月二十五日印刷
昭和十三年八月三十一日發行
(非賣品)

著作兼
發行者 安達鏡子

印刷者 河合勝夫

印刷所 東京市板橋區志村町五番地
凸版印刷株式會社板橋工場

終

